

て横文字で表され呼ばれているが、私にはいつまでも樺太であり、大泊であり、そして西柵丹なのである。そして更に、アブラであり、ヤチブキであり、コゴミなのである。更にそれを集約したものが、ジロの思い出につながってくる。私は、頑固にも昔の呼び名に固執する者であり、今後も意志を曲げるつもりはない。これは、樺太から引き揚げてきた人々の共通の思いであらう。

## 祖国への断章

東京都 近江 一男

### 一 私の生い立ち

私の家は近江家の絵本家で、昔、明治の中期に事情があつて近江の国滋賀県から、北海道は函館市の、現在函館空港のある赤川町に移住した。その別家は今も函館市内の桔梗町に、豪邸として保存されている。その後私の祖父は、一家を挙げて樺太（サハリン）に移

り、豊原郡の落合町に腰を据えた。昭和の初期に、父は北樺太に近い恵須取（ウゴレゴレスク）町にあつた、王子製紙恵須取工場の動力部門に勤務していた。

私は、昭和六（一九三一）年九月一三日、北海道の栗山町で生まれた。母は姉の家にお産のために身を寄せていて、そこで私を産んだのであつた。しばらくして、母と私は恵須取に戻り幼年期を過ごし、昭和十二年四月に恵須取第二尋常小学校に入学し、担任の宮川先生の訓育を受けて、六年間を平穩無事に過ごした。昭和十九年三月に、当時は国民学校となつていた恵須取第二国民学校を卒業し、樺太庁立恵須取中学校に入った。昭和二十年春までは落ち着いた中学生活で、一人息子として父母の寵愛を一身に受け、何不自由なく大事に育てられていて、私も何の不平不満もなく過ごしていた。

そして昭和二十年春、中学二年生になったときから、今までの平和で穏やかだった生活が一変してしまった。あの二度とあつてはならない悲劇が、そこから始まつたのである。

私は、この引揚げ労苦記録を書くに当たって、あの敗戦前後の悲惨極まりない出来事を現在の若い人々に書き残して、「平和の尊さ」と、この平和がただで購えたものではないことを後々まで伝え残して欲しいと思ひ、あの苦しかった日々の行動を、日を追って記述することとした。

## 二 塔路炭鉱への動員

昭和二十年四月、新学期最初の朝礼、中学二年生になった嬉しさと期待に胸を膨らませて、校舎前の広場に整列した。

そこで校長から受けた訓示は、「一年間の学業停止、全員勤労働員に出る。動員先は後で示す。全員気持ちを引き締めて、期待に沿うように頑張ろう!」という示達であった。来るべきものがきたという気持ちだけが、心の中にあつた。四月中旬になって動員先が決定した。学校から北に約二十キロメートル離れた塔路炭鉱であった。もうこの頃の樺太の炭鉱では、必要最小限の採炭要員、保安要員を残して、ほとんどの鉱員が九州方面の炭田開発のために徴用されていったので、

その穴埋めに動員されたのだった。

間もなく日常の生活必需品を詰めた荷物が、トラックに乗せて運び出された。私たちは上級生と一緒に、行軍で恵須取町の外れにあつた、三菱炭鉱の古い独身寮に入った。そこで仮入所式が行われ、私は中学二年生隊の第二小隊第五分隊の分隊長を命ぜられた。約十人ぐらいの学友が、一つの部屋に詰め込まれた。翌日、六時起床でマツチ箱のような客車が連結されている列車に揺られて、浜塔路に向かった。浜塔路駅から炭鉱の詰所まではまた、行軍だった。

詰所で作業の役割分担が達せられて、上級生は坑内作業、二年生はベルト・コンベヤーで地上に運ばれた石炭が、途中でコンベヤーからこぼれ落ちるのをシャベルですくいあげる仕事だった。石炭の一かけらは血の一滴だから、一片でも落ちていたらすくっていた。作業は五人ずつ一組となり三十分交替であつたが、教練教官の西尾少尉が付き切りで監督していて、休憩時には横になることはもちろん、腰を下ろすこともできずに、折り敷きの姿勢のまままで休んでいた。

この様子を初めから見えていた炭鉱の係員が、「将校さんこんな仕事のやり方をしていたら、学生さんは一日でぶっ倒れちゃうよ。側についていて、時間から時間まできちっとやらされたら、一遍で参ってしまう。

ましてやこんな重労働をしたこともない学生さんでは無茶ですよ」と言った。教官は、「地方人は口を出さないで下さい。学生は私が指導しているのですから」と答えて、相変わらず同じ状態を続けた。更にその係員は、「この仕事を知らない人にかかっちゃ無茶苦茶なもんだ。学生さんがかわいそうだ」と、捨てぜりふを残して行ってしまった。そのうちに教官もどこかに行ってしまった。

昼休みにまた、係員が来て詰所で休むようにと私たちを呼んでくれた。「あの将校さん、おれに横から口出しするなと言ったが、あんたたちがかわいそうで見えられなかった。戦さのやり方は知っているだろうが、この仕事にかけてはこっちが専門だ。仕事というものはね、朝きたら、じっくりと時間をかけて、足場を固め段取りをちゃんとするものだよ。二、三日で終

わらないのだから、時間を区切ってやっていたら体はもたないよ、そこが分からないんだなあ。長い目で見れば、おれの言う方が能率が上がるんだ。がつがつやらないで、じんたらじんたら、やんなさいよ」と、教えてくれた。

朝、出掛けに急拵えの木箱に詰めた弁当をもらうのだが、いざ昼食、とふたを開けて見ると、飯が片側に寄っていて半分ぐらいになっている。大概は、大豆、昆布、よもぎなどの混じったご飯に、鮫の竹輪だけだった。

その後、勤務体系は、午前零時から正午、正午から午後十二時の二交代制となり、一週間で夜、昼の交替となった。仕事はきつく、常時空腹で、とにかく眠たくて、昼夜の感覚が麻痺し、新聞、ラジオからも遠ざかり、思考能力も減退してしまった。一体全体、世の中はどうなっているのかもさっぱり分からなくなっていた。

栄養悪化を補うために、カレーライスを食べさせようという案が教師側から提案されたが、肉など薬にし

たくても無いので、肉の代わりに貝を使うということになり、私の分隊が貝掘りの任務を受け持つことになった。

五月一日作業開始。快晴で暑く、上半身裸になって作業した。監督者もいないので開放感に溢れて、久しぶりの自由を楽しんだ。場所は、丘陵に囲まれた塔路湖の砂浜で、土地の人が「ばか貝」と呼んでいるもので掘った貝はその場で殻と身をナイフで切り離し、中身を一斗缶に約二百人分を入れ、寮まで運び、日曜日の昼食にカレーライスを作って、みんな食べ放題で久しぶりに腹いっぱいになった。ところが、私は翌日に発熱し、全身がだるくて精気が失われて、床に伏してしまった。患須取の両親宛に初めて手紙を書いたが、文面は「元気でやっているのご安心下さい」とした。数日後、うつらうつらしていると、母がそばに座っていた。びっくりしていると、母は「お前から元気でやっているお手紙が来たので安心していたら、昨日石井のおばさんが来て、『重しげの手紙に、一男ちゃんが病気で寝ていると書いてあったので、知らせに来

た』と言って来たので、迎えにきたんだよ。これから教官室に行こう」と言ったので、渋々といつて行った。教官室には、西尾少尉、藤井先生など数人の先生がおられた。母は、「連れて帰り自宅療養させたいと思いますので、お許し願いたい」と申し出た。私は心の中で、母はこの非常事態に何ということ言うのだろうと思った。今に西尾教官が、「許可できません」と言うだろうと思っていた。しばらく沈黙が続いたが、ややあつて藤井先生が、「お母さん！ 連れて帰ってしっかり治した方がよい。そうして下さい」と言われた。先生方は、西尾少尉に気兼ねしているようだったが、藤井先生の一言でほっと救われたようだった。

その日は旅館に泊まることになり、すぐに横になった。母と雑談を交わしていたが、「お前の手紙に、父上様、母上様と書いてあったのを読んで、お父さんは、一男もこんな書き方をするようになったのかと言って涙ぐんでいたよ」と聞かされた。私としては、父さん母さんではちょっと変なので、少々気取って書

いたのだが、それを喜んでくれたと聞けば、やはり親は子供のことを気遣っているんだなど、いささか嬉しくなった。その時、急に首や肩から、重しがさあっと落ちて体が軽くなったような気持ちになった。起きあがって、大声で「やあ！ 背中から重い物が無くなった！ すごく楽になった」と叫んだ。母は、「それは良かったね、お前も責任を感じて気が張っていたんだね」と喜んでくれた。そこに夕食が運ばれた。見ると銀しゃりではないか。旅館の人は、「普通は代用食だけど、今日は特別ですよ。早く良くなってね」と、ここにこして言っていた。

翌日帰宅。すぐに王子製紙附属病院で診察を受けた。結果は「肺浸潤」と診断されたが、軍の学校に行くのに肺浸潤では駄目なので「気管支炎」とした。薬もないので安静にして、とにかく栄養をつけなさいということだった。

その日から母の大奮闘が始まった。父の世話はそこのけで、あらゆるつてを求めて卵、鶏肉などを手に入れて食べさせられた。今にして思えば、母も必死

だったのだ。

約一カ月静養して、ほぼ回復したので塔路に戻って教官室に申告に行った。藤井先生が、「戻らなくてもよかったのに、二年生は本校に戻るんだ」と言われた。部屋に戻ってみんなと雑談をしていたら、四年生の数人が部屋に入ってきて、「お前ら！ 気合いを入れてやるから廊下に並べ」と、怒鳴った。廊下に出ようとしたとき、一人が私の顔をまじまじと見て、「お前が病気になったやつか。みんな！ この部屋は止めた。病人を殴っておかしくしたらまずい」と言って、そのまま出て行った。

塔路炭鉱から本校に戻ることが決まったある日、移動準備に忙しくしていると、「全貞寮前広場に集合！」という西尾少尉の声がかかった。整列していると西尾少尉が来て、「しばらく留守にしていたが、豊原に行つて最新の戦法を受講してきたので伝達する。一つは対戦車攻撃で、火炎瓶攻撃は戦車の装甲が厚くなったので効果が少なくなった。今度は、戦車の一番弱点であるキャタピラーに爆雷をかませる方法に変わっ

た。アンパン攻撃といって一人一台目標である。今一つは斬り込み戦法であるが、これは諸子も聞いているように、ガダルカナル、サイパン、アッツなどで成果を挙げている。今日はそれを実際にやってみる」との訓示があった。

りんご箱をリヤカーに乗せて、「これを戦車と思え」と言われた。約三十メートル前方から押して来るのに向かって一人づつ野球ベースを持って、前傾姿勢で小走りで突進し、車輪の下にベースを突っ込み、素早く側面に退避する動作を演じた。「そんな穩慢な動作では戦死だ！」とか、「そんなでは、戦車のそばに行く前に戦死だ！」などと怒鳴られて、みんな真剣に取り組んだが、天気は良いし、久しぶりの骨休みのような日で、レクリエーション気分だった。西尾少尉も、それほど敵しくはなかった。

次に、斬込隊の訓練だった。これは新しく採用された第六匍伏で、二十四時間に五十メートル進めばよいとされていた。およそ蝸牛かたむぢのような速度だった。こころでも西尾少尉からは激しい声がかかった。口の回り

にも、目の上にも土が付き、上着のボタンもちぎれて哀れな姿になっていた。それでも、もし戦場に出たら習い覚えた新戦法を駆使して闘おうと意気軒昂だった。最後に講評があって訓練は終了した。

### 三 大平炭鉱へ、そして敗戦

翌日、全校生は塔路の街の中央にある神社の境内に整列した。西尾少尉が抜刀して、「命令！ 敵は恵須取町に侵入した。我々は国道を強行軍で戻り、敵を撃退する。二年生は山道を大平に出て前進、本校にて合流せよ。命令終わり！ 全軍出発！」と声を大にして言った。道の両側に並ぶ大勢の町民の視線を背に、ラッパ隊を先頭にして四列縦隊で歩調をとって堂々と進んだ。国道に出る手前で、なだかな丘を前屈姿勢で散開しながら進んでいたら、主導の藤井、中居両先生が、肩を並べて歩き始めた。私たちもそれに習って隊列を乱して歩き出したが、別にとがめられなかった。そのまま大平第二国民学校の裏山から校庭に抜けて、そこから約八キロメートルの道を本校に急いで。帰ってからなるほどと合点したのは、この日は恵

須取神社の宵宮であった。軍事教練で久しぶりに家に帰った。

帰校して間もなく、二年生は大平炭鉱に行くことになった。この炭鉱は王子製紙の経営で、学校にも従業員の子弟が、多数在籍していた。マッチ箱のような社鉄軌道に布団袋と共に乗り込んだ約百人が、独身寮に入所した。今度の仕事は、「松精油採り」であった。

朝六時起床、点呼、朝食、作業準備、そして二列縦隊で、約三キロメートルほど奥に入った中の沢が仕事場だった。丘と丘の間の狭い沢地に、コンクリートで固めた釜が三基据えられていて、松の枝を詰めて水を入れて煮沸すると、真っ黒なタール状の液が出来上がり、それを精製工場に輸送するためにドラム缶に詰め、野積しておく作業である。体の小さい者が松林に入り、鋸で枝を切り釜のそばまで運搬すると、体の大きい者が釜に入れる寸法に切断して詰め込み、煮沸、処理作業をするという段取りになった。

八月十日午後、ごう音が上空から響いてきた。みんな作業の手を止めて空を見上げていると、飛行機が二

機、北の方に向かって飛んでいた。異口同音、だれか「ともなく、「日本の飛行機だ！ 万歳！ 万歳！」と叫んだ。翼の標識が日の丸のように見えた。何しろ飛行機が飛んでいるのを見たのは初めてだった。

昭和二十年八月十二日、夕食を終えたところに中居生が、「全員部屋に戻らずに、ここで待機しておれ。本校と連絡をとるから」と言っていてそそくさと出て行った。しばらくして戻って来られて、「ソ連が参戦したらしい。みんなは、一時間以内に身の回りの品をリュックサックに詰め、残りの物は布団袋に入れてここに積み。午後九時に出発、本校に戻る」と言われた。いよいよ来るべきことが来たと思ひ、緊張しながらそれぞれ身の回りの整理をした。どのような事態になっているかも分からず、戦況の緊迫を知る由もなかった。

午後九時に出発したが、真っ暗闇で辺りは静寂そのものだった。路上に人の気配がするので透かして見ると、上級生が塔路から私たちと合流するために、すでに到着していたのだった。山道から直接に国道に出て

前方を見ると、大火災が夜空を焦がしていた。思わずきれいだなあと心の中でつぶやいた。入泊の王子製紙の紙貯蔵倉庫群に焼夷弾が落とされて燃え上がっているようだった。

本校にたどり着いたのは、午前一時ごろだったと思う。「先生たちは、これから職員会議を開く。近くに家のある者は、帰ってよろしい」との指示があった。自分の家に向かう者、校舎の真向かいにある寄宿舎に向かう者と散って行ったが、私は家まで遠いので、その夜に帰るのは断念し、校庭の芝生に横になったが、夜中は冷え込んで眠るところではなかった。

夜明け近くに突然真向かいの丘から変な音と共に光った物体が飛んできた。頭の上を不気味に飛び越えては消えていった。「曳光弾だっ！」という声近くで聞いた。職員会議は長引いているのか、教師はだれも姿を見せず、寒さと先行きの不安で心細さが加わってきた。

八月十三日早朝、やっと岡庭先生が出てきて、「我々は本日より恵須取防衛隊の指揮下に入る。ここ

で学徒戦闘隊を結成し、三年、四年はここに残り、二年生は、松尾沢で戦車壕を構築する。今から出発！」と言われた。農具小屋から剣先スコップ、鍬などを持ち出して肩に担ぎ、二列縦隊で行進した。だれも何も言わない。本通りから武士川を渡って中島町に出たが、家並みには人の気配もなく死の街と化していた。町外れに出て家並みが切れるところに入ると、国道は人で埋まっていたが、ほとんど女、子供、老人だった。主婦は赤ん坊を背負い、片手に大きな風呂敷包み、片手に幼児の手を引いていたが、「足が痛いよう！」と、泣きわめく幼児を怒鳴りつけながら引きずるようにして歩いた。

空は真っ青に暗れていた。本来ならば、明日から盆の入りで、家族が集まってだんらんの日を過ごすのにと考えながら歩いていった。時々、「学生さん！お願ひします」「学生さん！頑張って下さい」という声が掛かった。「ああ、期待されているんだな、しっかりしなくては」と思う反面、スコップと鍬では何ができるかと、暗たんたる気持ちにもなっていた。日の

つり上がった男たちが、日本刀を腰に差して反対方向に行くのに出会ったが、「日本刀なんて、よく持っていたもんだ。おれの家には無かったもんなあ、父はどろして日本刀を置いておかなかったんだらう」などと、たわいの無いことを考えながら歩いていった。ふと道端を見ると、老人が布団から顔を出し、目を引きつらせながら両手を合わせて、「連れていってくれ！」というようなしぐさをしていた。しかし、どうにもすることがならず、頭を下げて通り過ぎたが、つらいことだった。

松尾沢に着き、休憩していると食事の知らせがあり、出ていくと大きな鉄鍋に「タモきのこ」のみそ汁と、白米の大きなお握りに沢あん二切れずつがあった。夢中で食べ続けた。空腹が満たされて一休みしていたら、後方の松林に軍用トラックが次々に到着し、兵隊さんが陣地構築の材料を降ろした。「ご苦労さんです。これから何が始まるのですか」と聞いたら、「ここでソ連軍を迎え撃つためのトーチカを造るんだ。明日、上敷香から本隊が来るので、それまでに陣地を

構築するのだ」ということだった。我々は百人力を得たようで浮き浮きした気持ちになった。

日が暮れたが、全員民家で寝ることもならず、防空壕にごさを敷いてごろ寝した。

#### 四 戦車壕掘り

防空壕で朝を迎えた。戦争は、どこでやっているのかと疑いたくなるほど穏やかだった。点呼の後、「国道と恵須取川の間に戦車壕を掘る」との指示を受けて、作業を開始した。

草原で昼食を取っていると、兵隊さんが引揚げ始めたとの知らせで行ってみると、撤収準備を慌ただしくしている最中だった。「どうしたのですか？」と聞いたら、「本部から本隊に戻れとの命令があったので、上敷香に帰るのだ」との返事だった。トラックが続々と発車して行った。置き去りにされたようで、啞然としてしまった。

午後、「家族の疎開先を知っている者は、会いに行ってもよい」という指示が出た。私は隣組が疎開したという「布礼」に行くことにした。上恵須取市街を

抜けて東西の分岐点から西に向かい下布礼、中布礼に  
点化する農家で、第八隣組の疎開先を尋ねたが分から  
ず、更に奥に入った一軒家で、洗濯をしたり炊事をし  
たりしている人がいたのでのぞいて見ると、何十家族  
もいて雑然としていた。よく見ると同じ長屋の佐藤さ  
んと正人君がいた。「小田さん！うちの母さんを知  
らないか」と声を掛けると、「一男ちゃんじゃないの、  
どこにいたの、お腹が減っているんでしょう。これ食  
べなさい。お母さんはね、手にかかる子供がいなか  
ら、防衛隊の炊き出しに行っているよ」と、大声で  
言ってくれた。両親に会えると楽しみにしてきたのに  
がっかりしたが、腹いっぱいごちそうになって元気が  
出た。「元氣出して帰るんだよ」と励まされて、とぼ  
とぼと歩いて戻った。

その夜、壕で竹山君から大豆のいり豆や干し飯をも  
らいながら、彼の話聞いた。「今日、同級生のオー  
マ・アプシに会いに行つた。彼は対岸の朝鮮人農家の  
部落に避難している。そこで聞いた話では、日本は戦  
争に負けたいらしい。日本人は南へ南へと下って日本に

帰るそうだが、朝鮮人は残るといふことだ。アプシが  
『みんなに食べさせてやれ』と言ってこれを持たせて  
くれたのだ」と話した。みんなは、半信半疑で聞いた  
が、反発する者や、質問する者はいなかった。「そん  
なことがあるはずがない」と、みんなは腹の中で思っ  
たに違いなかった。

翌日の八月十五日の昼近くに、父がひょっこりと訪  
ねてきた。「中学生が、松尾沢で戦車壕を掘っている  
と聞いて、もしやと思つて来た。父さんは防衛隊で、  
向かい側の丘のふもとにいます」と言った。「母さん  
は？」と尋ねると、「国防婦人会で握り飯作りに行つ  
たがり会っていない」とのことだった。「これでも食  
べろ」と言つて干し飯を袋から出して、手のひらにの  
せてくれた。次の日、今度は母が訪ねてくれた。中居  
先生の許しを得て母たちの宿所に連れて行かれたが、  
そこは農家で、土間に入ると王子病院の金井院長が、  
軍服姿で腰掛けていた。先生の後ろには看護婦さんが  
五、六人、先生を守るようにして座っていた。みんな  
は濃紺の従軍看護婦の制服姿だった。「母さんは、防

衛隊の人たちのお握り作りを甲クラブカブでしていたのさ。見てごらん、熱いご飯を握るから手の平がこんなになってしまった。母さんたちは、最後まで恵須取にいたんだよ。昨日は、朝から飛行機がひっきりなしに飛んできては爆弾を落とし、機銃掃射をして、とてもいられたもんじゃないので、引き揚げることになったのさ。山伝いに逃げる途中、国道で機銃掃射に遭って、とっさに落ちていた木枝を担いで掘割に飛び込んでじっとしていたけど、もう駄目かと思っただよ。髪の毛一本立ちとはあんなことを言うんだね」と声を高めて話し、更に続けて、「それからね、甲クラブから下の方を見ていたら、茶々（上恵須取の旧名）の方から来たトラックが撃たれるのを見たんだよ。朝鮮部落の方から荷台に人がいっぱい乗って、すごい勢いで王子病院の裏に差し掛かった時、銃撃音が響いたの。『乗っているのはだれか！』とどなったので、よく見ると鉢巻きをした女子青年団の人たちだった。なんでもこの危ない所にわざわざやって来るんだろうと思っっているうちにいきなり左へ曲がって橋を突っきってこっ

ちに来たので、みんな胸をなでおろしたよ。でも一人運転台から落ちたようだったよ。母さんは、これから布礼の隣組の人たちが疎開しているところに行くから、何かあったらきなさいよ」と言って別れた。

昼間の労働がきついので、夜は皆、死んだように眠りこけた。遠くで声がかして目を覚ました。「近江！近江！」と中居先生が、私を叫び続けていたのだった。飛び起きて夢中に入り口に行ったが、実際はまだ夢心地で、寝ている者を構わず踏みつけていた。

「近江、参りました」と敬礼したら、「何をしてたんだ。非常呼集がかかったのを知らないのか！」と、怒鳴られてしまった。「今夜から、各分隊ごとに一時間交替で不寝番勤務をする。隊員を起こせ」と命令された。真っ暗な中を壕のそばに行って警戒の任に当たったが、周りは何も見えず虫の音も聞こえない静かな夏の夜であった。かさかさとした音がするので、「だれだ！どこへ行く」と、誰すい何をすると、「はい、川におしめを洗いにいきます」とか、「ちょっと、小便をしに行きます」とかの返事が返ってきた。この辺りに

は避難している人が、思ったよりも多くいることを感じた。そんなことを考えているうちにまた、睡魔が襲ってきて眠ってしまったらしい。はっとして目を覚ますと、分隊員もみんな眠ったらしい。慌てて壕に戻り六分隊と交替した。

翌朝、六分隊の石井がいけないという騒ぎが起きた。

石井とは小学六年間同級だったので随分と心配していたが、昼前になってばつ悪そうに戻ってきた。私は安心した。みんなに「どうしたんだ」と聞かれて、「不寝番に行く途中でつまずいて転び、そのまま道路で寝てしまったらしく、知らないおじさんに蹴飛ばされたが、それでも眠っていて、そのおじさんに助け起こされて家に連れて行かれ、そこでご飯をいただき、風呂にも入れられて、ふかふかの布団で今まで寝ていた」とのことだった。みんなは「うまいことをやった」と羨ましがった。

昼間はソ連兵が来て機銃掃射をするようになり、その都度近くの林に逃げ込んでいたが、能率が上がらないので、壕の上にしたこつぼを掘り、空襲があったらそ

こに避難することにした。憲兵隊の車が、車の両側に「関東軍、ウラジオストックを占領、更に進撃中、国境警備隊五〇度線突破、北樺太占領」と書いて走っているのを見た。みんなは、心強く思っ見ていた。

## 五 逃避行

八月十七日。夜明けとともに、上恵須取市街に対してソ連軍による執拗な銃爆撃が始まり、その帰路に必ず私たちの作業場にも機銃掃射をいった。壕は粘土質で、スコップに掘った土がくっついて思うように作業は進まず、急に逃げられる状態ではなかった。ソ連機は低空で音もなく襲って来る。逃げようともかくが足は抜けずに気ばかり焦る。やっと右足が抜けて安心すると、今度は左足が埋まっている。機銃が火を噴いて迫って来る。林の中からは、「近江！ 逃げる！ 近江！ 逃げる！」という中居先生の声がある。足が抜けないのであきらめてぼう然として空を見ていた。頭の中は真っ白くなっている。全身がちがちと震えが止まらない。両翼の中間から火が見えた。ソ連機の操縦士が身を乗り出してこちらを見ている。「もう駄目

かな」というぼんやりとした思いが頭をよぎった。その時ようやく足が抜けたが、敵機は、はるかかたに飛び去っていた。

作業は、たこつぼでの待避も危険となったので、林の中に避難した。上恵須取の上空を見ると、急降下爆撃が繰り返されていて、ずしんという鈍く重たい地響きが伝わってくる。同時に火柱も上がっている。「これでは全滅だろうなあ」と思った。銃爆撃は段々と我々の方に近づいてきた。爆弾投下と同時に機銃掃射をして来る。「伏せろ！」の声がしても、体は硬直していて思うように動かない。向かい側にいた山崎君が、「父さん、母さんさようなら。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と手を合わせて拝みだした。周囲の者もただ黙って見ている。

空襲が一段落したので林から出ると、変な臭いがする。横にいた渡辺君の胸に目をやると、大便がべったりとついていた。白米から玄米になって、消化が悪くなり下痢をする者が増えて、作業中でも林の中に駆け込み、ところ構わずに排泄していたが、その上に伏せ

たらしく、おかしいやら、かわいそうやらで何とも複雑な気持ちだった。

日はとっぷりと暮れたが、上恵須取は赤々と燃えている。二十時ごろ、松尾沢を撤収して上恵須取に向かうとの指示が出た。隊伍を組み肅々として街の入り口まで来ると、「ここで上級生を待つ」とのことで小休止となった。三々五々腰を下ろして休んでいると、闇の中から近づいて来る人があった。よく見ると三人の将校だったが、そのまま通り過ぎようとした。「何か言って下さい」とだれかが言った。三人の将校は立ち止まり、先頭の将校が、すぐ後ろの人を指さして「この方は恵須取特警隊長の中西大尉です」と紹介した。恵須取にも将校がいたんだと頼もしく思ったが、それにしても部下がいないのはどうしたことかと心の中で思った。大尉は弱々しく「天皇陛下の御ために、皆さん！ 最後まで頑張ってください。お願いします」と言うや否や、すたすたと暗闇に消えて行った。

すかさず中居先生が私たちを集めて、「学徒隊をここで解散する」と言った。全く突然の発言だったの

で、一瞬真意を凶りかねてぼかんとしてしまった。

「別な方法で組織するのだろうか？」と良い方向に考えたが、中居先生の次の言葉で、がぜん不安が襲ってきた。「今からは、それぞれ思い思いの行動を取って欲しい。おれも、これからどうしてよいのかわからない」と悲痛な声で言われた。「先生！ どうしてですか」「先生！ これからどうなるのですか？ 一緒に連れて行って下さい」と次々に叫んだ。先生は「おれは、この道を歩いて行く。よければ後ろからついてくれればよい」と虚ろな響きが闇に流れて行った。

私は必死に思いを巡らした。「先生がどうしたらよいか分からないと言っているのだから頼ることはならない。私はどうすべきか？ 内恵道路を東海岸に出て汽車で南下し、落合の伯父の所に行くか、または母がいるであろう布礼に行くか。しかし母は恐らく疎開した農家にはいないだろう。とにかく布礼に行けば手掛かりは得られるだろう」との考えにたどりついた。私は「おい！ 二小出身の連中は布礼に行かないか！」と叫んだ。すると、二小の同窓生が何となく集まって

きた。先生に「私たちは、布礼に行きます」と言って別れを告げ、歩き出した。出発際に、いとこの五十嵐に「一緒に行かないか？」と誘ったが、彼は「西棚丹の家に帰るから」と言った。

爆撃で落ちた橋を何とか渡り市街地に入ったが、通りには焰がめらめらと体からみつつき、顔が熱くなるので両腕で覆って走り抜けた。一行は榎本、花岡、寺川、船場、鈴村、菅原、望月、近江の八人で、黙々と歩き続けた。不眠不休で夜を通して歩いた。何が何でも母たちに会いたい一心だった。

望月君が後ろから声をかけて「こわくて歩けないので、ちょっと休んで下さい」と、二、三回泣き声で叫んでいたが、無視していた。そのうちに「もう歩けません。頼むから休んで下さい！」と言って泣き出した。仕方がなく林の中で休むことにした。林の中には大勢の人が休んでいたが、口づてでひそひそと話しているのを聞くと、「日本は戦争に負けたんだとよ」とか、「広島に新型の爆弾が落とされたってよ」などと言っている。また、「そんなこと嘘だべや、絶対負

「いけないべや」「いや、本当らしいぞ」そんな話を聞いているうちに、つーんと突き上げて来るものがあって、気持ち揺れ動きすごく悲しくなり、ついには声をあげて泣きじゃくった。泣いても泣いても納得できない気持ちだが、ますます深く広がって行くように思えてきた。「日本が負けたということは、どういうことなんだろう。負けた生活の世界なんてあるはずがない。そうであるならば、この世に生きる価値はない。勝つ生活だけが光明なのだ」と自問自答しているうちに眠りについてしまった。どのぐらい眠っただろうか、ふと気がつくとき空は白みかけていた。六時半ごろになったか、「さあ、行くぞ」と、みんなに声を掛けて国道に出た。

国道の両側は松林で、どこに通じているのかは分からないが、とにかく歩いた。四キロメートル歩いたときに、鈴木、船場、寺川の三君が家族と再会して抜けて行った。八時ごろ道路の左端に小寺君が立っているぞ」と教えてくれた。そこで二君と別れた。私も心

細くなって、「私の母さん知らないか？」と聞くと、「ああ、近江君の母さんもいるぞ」と言われて耳を疑った。「ああ、よかった」と胸をわくわくさせて、防風林の細道を約二十メートルほど入ったところに、ぽっかりと王子造林の苗園が目に入った。前方の飯場には大勢の人たちが、炊事や何かで動き回っている。右手には詰所のような建物があった。戸口から中をのぞくと、炉があって、回りに二人の女性と、子供が一人腰掛けて話しをしていた。よく見ると、佐藤のおばさんと母だった。私は声をかけずに突っ立っていた。人の気配を感じたのか、おばさんが顔を上げて「あっ！」といって母の腕を引っ張っていた。「ほれ、一男ちゃんだよ」と言ったとたんに、母はぎょっとして顔を上げて私を見た。両眼から「ほろ、ほろ、ほろ」と涙が落ちるのが見えた。「お前、朝ご飯を食べたかい」と言ったので、「いいや、食べていない」と返事をした。「母さんたちは、今食べ終わったところだ、残り物だけどうぞよかったです。さあ食べなさい」と言って食事の準備をしてくれた。ひと休みして

から、「さあ、出発」となった。母が言うのには、これから久春内まで歩いて、汽車で真岡（ホルムスク）に行き、そこから豊真線で大泊（コルサコフ）に出て北海道に渡り、姉のいる栗山町に行くという考えだった。佐藤さん母子と共に、国道を南下した。多くの人  
が思い思いに歩いていて、約四キロメートルばかり歩いたところに、後ろの方から「おーい、おーい」と言  
って大きな声が出た。だれだろうと立ち止まって振り返ると、思いがけなく父が息せき切って走ってきた。

「夕べ防衛隊が解散したので、お前たちの後を追って夜通し歩いてきた。茶茶の東西の別れ道で、よっぽど東へ行こうかと思つたが、待てよと考えて西へ行くことに決心した。会えてよかった！」と父が言い、喜びあつた。母が「これで家族が一緒になつた、早く歩いて北海道に渡ろう」と、嬉しそうに声を弾ませて言った。五人は気を取り直し、再び力強い足取りで進んで行つた。どれぐらい歩いただろうか。しばらくして珍チン内町ナイチョウに入った。

道路際の荷台に日用雑貨を山と積んで、その主人と

思しき人が、「露助に奪われるのは、けたくそ悪いからどんどん持って行つてくれ！」と大声で叫んでいたが、こちらも欲しい物はあつても荷物になるので、も  
らうこともならなかつた。残念な思いで通り過ぎた。  
小田州オダスの町外れから海岸に出た。足底にまめができて  
歩くと痛い、波打ち際を歩いているときは、地下足  
袋に海水が染みこんで気持ちよかつた。

やがて大きな沼が見えた。来知志湖ライチシコだった。日暮れ  
になつたのでそこで一泊することになり、とある大き  
な家に入った。来知志部落はもう無人で、焼けくす  
ぶつている家があつた。後で聞いた話では、この家は  
アイヌ人をはじめ多くの部落民から敬慕されていた医  
師一家が、敗戦に悲観して自宅に火を放ち、一家焼身  
自殺をしたとのことだつた。

広い部屋に我々五人と一緒にここまで来た隣家の下  
山さんの家族七人が入つた。夕食もどうにか食べるこ  
とができたが、下山さんの娘が、焼け残っている荷物  
から着る物をひっぱり出しているのを見て、母と佐藤  
さんは「後で、同じ部屋にいたと言われるのが嫌だか

ら、この家を出よう」と言い出して外に出た。「さあ、これからどうしようか。一晚中歩こうか」と話している。父が来て「おれは疲れていて、もう一歩も歩けない。どうしても歩くのなら、ここに置いて行つてくれ」と言い出した。「父さんも勝手だなあ。この期に及んで何ということ言うんだらう」と腹が立った。

道端の草むらで野宿をすることにし、みんなは座り込んだが、夜風が思った以上に冷たくて、夜明けには夜露も降りてまんじりともできなかった。私は、月明かりを利用して、母に足の豆を縫い針で破ってもらった。

朝、早立ちして歩き続け、昼ごろ恵比須の部落に届いた。お寺で休ませてもらうと思つて本堂に入った。既に百人ぐらいの人がいて座る場所もなく、仕方なく廊下で横になった。間もなく婦人が本堂に来て、「皆さん、本当にご苦勞様です。狭くて大変ですが少しでも体を休ませてください。何かありましたら遠慮なく言つて下さい」と親切に言つていた。よく見ると、荒川先生の奥さんだった。母が声を掛けると、奥

さんもびっくりして「よく来られましたね。主人も待つていますからこちらに」と言つて、奥の部屋に案内してくれた。そこには、二小で三、四年担任だった荒川先生がおられて、「よく来た」と快く迎えてくれた。しばらくぶりに風呂に入り、銀しゃりを食べて、ふわふわの布団に寝かせてもらった。

翌朝、お礼を述べて久春内に向かつて出発した。久春内からは列車に乗つてすいすいと行けると期待していたが、駄日だった。久春内の小学校で一泊するつもりだったが避難民を受け入れる能力がないので、泊居トヨリオルに移つて欲しいとのことで貨車に乗せられた。

泊居の収容所は小学校の教室で、そこにむしろを敷いただけの生活を約二カ月間していた。到着した夜、私は原因不明の高熱を出して、父に背負われて密山医院に行き、手当を受けるといふこともあった。

十月末になると、ソ連軍から布告が出て、「以前生活していた所に戻り、正業につけ。違反者は銃殺にする」というきついものだった。仕方なく、みんなは二百キロメートルも離れている恵須取に歩いて戻つた。

父は、王子製紙恵須取工場の操業再開で、元の職場に戻り働き始めた。私は十一月下旬に恵須取中学校の授業再開で学校に戻ったが、一週間すると第三小学校の校舎に移され、更にしばらくすると第二小学校の校舎に変わり、昭和二十一年三月に再び本校に戻り、やっと落ち着いて勉強ができるようになったが、翌年の昭和二十二年三月、遂に本校は閉鎖されてしまった。

五月のある日、同期の花岡君が、牛一頭を連れて歩いていのに出会った。ソ連人が所有している牛を草原に連れて行き、牧草を食べさせる仕事をしているとのことだった。「もう一軒のソ連人の家から、この仕事を頼まれているので、お前やらないか」と言われたので、働く気になり、翌朝花岡君と一緒にその家に行った。以前の日本軍の憲兵隊官舎だった家で、牛二頭、毎日帰宅時に牛乳五合をくれるとのことだった。その他三食付きで給与は五十カペーク（当時で約五十円）で、すぐに引き受け、翌日から通勤した。ソ連軍憲兵隊長のハラキウオスが雇主で、食事は奥さんが作ってくれて、給与は憲兵隊事務所でもらった。「家

に手のかかる者がいない主婦は働け。違反者は銃殺にする」との回覧が回ってきたので、母は、もっこ担ぎの肉体労働を強いられた。

九月下旬のある日、以前恵須取第二小学校で六年生よりの担任だった渡辺先生が、ふらりと私の家に来てきて、「小学校の生徒六百五十人に対して先生十人では、とてもではないがやっていけないので、明日から学校に来て手伝ってくれや」と言われた。ひと晩考えて、ハラキウオスに事情を話し、学校に行くことにした。一週間の見習いの後、一年生を担任した。

昭和二十三年四月に閉校になるまで教師としての生活をしていった。

母は元来高血圧だったが、毎日のきつい肉体労働のために脳溢血となり、昭和二十二年十月九日に、あれだけ願っていた栗山町に帰ることなく四十二歳で死んでしまった。医者無し、薬無しでの見殺しだった。

昭和二十三年七月下旬、引揚げ命令が出て、恵須取港から船で真岡港に行き、丘の上にあった旧真岡高等女学校の収容所に入った。八月十八日に真岡港から引

揚船に乗り、二十三日に函館港に着いて、懐かしの北海道の土を踏んだ。

この日から、祖国日本での生活が始まったのだった。父と二人で、親類の家を転々として渡り歩いた。

最終的には、札幌市のいとこ（従兄）の家に落ち着くことができて、九月に私立北海高校の二年生に編入して、やっと心身共に落ち着きを取り戻し、勉学に励んだ。以来、五十数年波乱の人生を過ごし、やっと平和で静かな年金生活を送れるようになった。